



Title	＜書評＞後藤晴子『老いる経験の民族誌：南島で生きる〈トシヨリ〉の日常実践と物語』九州大学出版会、2017年、310頁、定価4180円
Author(s)	富安，皓行
Citation	未来共創. 2020, 7, p. 316-318
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76163
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

後藤晴子

『老いる経験の民族誌——南島で生きる〈トシヨリ〉の日常実践と物語』

九州大学出版会、2017年、310頁、定価4180円

富安 皓行

現代の日本は高齢社会といわれる。日本における平均寿命は、科学技術や医療技術の発達に伴い延び続け男女ともに80歳を超えている。それによって私たちは、「いかに老いるのか（老いればよいのか）」という課題に直面している。「老い（エイジング）」をめぐる問題について研究する際、私たちはいくつかの問いと向き合う必要に迫られる。すなわちそれは、どのようにすれば「老い」を捉えることが可能となるのか、ある特定の人の「老い」に着目した研究を通してどのようなことが明らかとなり、どのような学術的貢献をもたらすのだろうか、という問いである。

本書は、ある沖縄の離島の高齢者を中心とした調査協力者に対して、「聞き書き」という質的な研究手法を用いながら、そこに住む人びとの経験的な「老い」の様相を明らかにしようとした意欲的な・実験的な書である。本書の著者は文化人類学・宗教学・民俗学を専門とする後藤晴子氏である。本書は、学術・方法論的背景とリサーチクエスチョンの提示、調査地の提示（序章から第三章）、データの提示（第四章から第八章）、データを基にした分析（第九章）と、補論である終章という四つの

部分で構成されている。

著者の学術的立場と目的・研究方法は、「老い」の経験に着目するという点において一貫している。著者はある沖縄の離島の人の個人的な「老いる経験」を、地域的社会的な文脈も含めて分析する立場を明示し（第一章）、方法として「話者と調査者の往還の行為すべて」を研究対象とする民俗学的「聞き書き」を用いることを提示する（第二章）。この学術的・方法的立場のもと描かれる調査地の概要（第三章）は、ただ数的・統計的なデータを羅列するだけに留まらず、調査での語りにより再構築された重層的なものとなっている。

著者のフィールドワークから得られたデータを記述しているのが、第四章から第八章となる。著者は、調査地の人の使うフォークタムから調査地の集団組織の様相や関係を明らかにし（第四章）、身体に関する語りから調査地の人の民間医療・民間信仰などによる身体的「衰え」に対する対処法を明らかにする（第五章）。続けてその土地に住む人びとの個別具体的な人生の物語を生き活きと描写し（第六章）、「死」にまつわる語りに着目することで、

その島における「死」をめぐる儀礼と人びとの死生観を明らかにしようと試みる（第七章）。さらに、老年期に入っていない者たちの「老い」へのまなざしから、これから老いる経験のあり様について明らかにしようとも試みる（第八章）。

これらのデータに基づいて、南の島で老いる経験を「個と群れをたえず往還しながら、過去・現在・未来を横断しつつ、他者（および他者の経験）とともに紡がれる複層的な経験（225 ページ）」とし、「運」（「不確実性」）と「縁」（「情緒的なつながり」）という概念を取り入れて考察を行ったのが第九章である。終章では沖縄の離島と異なる北九州の地域の「老いの経験」を分析することによって、「文化的に共通する基盤を備えた地域における特質」を実験的に模索する（終章）。

私は調査で明らかとなった「老いの経験」が、どの程度個人の具体的なもの／沖縄の地域的なもの／「普遍性」を帯びたものとして語れるか、という視点のもと本書の評価を行いたい。なぜならば著者が、この点について今後の課題として言及しているからである。同時に著者が本書を執筆する際、この点について幾度となく思索したのでは

ないか、と読者である私が考えたからである。

本書の最も優れて評価できる点は、「老い」の個別具体的な経験についての「聞き書き」が非常に充実している点である。調査のフィールドワークの様子が「活き活き」と伝わるような記述を多くみつけられる。その一つの例として、第六章の第一節にある「死者の匂い」の記述が挙げられる。著者はある日、島外に住む A さんから島内の墓参りの随行を頼まれ、著者はなぜ誘われるのかと訝しながら随行する。墓参りを終えた後、知り合いの B さんから「いまが一番匂う時だからね」ということばを聞き、A さんの墓地に最近埋葬されたばかりの人がいることを知る。その言葉によって著者は、A さんが一人で墓地に行くことを躊躇い著者を墓参りに誘ったのではないかと推測し、調査地の人びとの死者に対しての感覚の鋭敏さと死者に対する考えの相違について分析するきっかけとなったのである。この例のみならず、本書における多くの個別具体的な「聞き書き」は、序章から第二章で繰り返し示された著者の学術的・方法論的な立場により可能となったといえるだろう。

しかしながら個別具体的な事例から、

その地域の社会的・文化的背景の分析・考察については、より自覚的に行う必要があったと考える。現に著者は、老いるという現象の探求を主眼としたため、沖縄研究・南島研究としての位置づけや検討をほとんどできなかったと反省している。より具体的には、本書の読者が調査地に住む〈南の島〉の人びとの「老いる経験」をどのようなコンテキストのなかで読むべきか読者が各々想像・模索する必要に迫られてしまう、という点に配慮すべきだったと私は考える。その一例として第三章に登場し繰り返し言及されている〈トシヨリ〉というフォークタームがある。〈トシヨリ〉と同じ音のコトバは「年寄り」として日本語にも存在する。著者が〈トシヨリ〉の意味内容について十分に説明しないまま書き進めようと、読者は各々が想像する「オキナワ」の、または各々が置かれたコンテキストで彼らの老いる経験を理解してしまう恐れがある。あるいは、〈トシヨリ〉の意味を理解困難にしてしまうコンテキストの複雑さそのものにも、着目する意義があったかもしれない。

著者は最後にこの沖縄の老いる経験の研究から、より広域的な「老いる思想」を想定することが可能ではないか、と

示唆している。この指摘は非常に興味深い。この「老いる思想」を体系化するためには、今後さらに様々な社会的・文化的集団の「老い」に関する経験的な研究の蓄積と比較検証が必要だろう。